

自己決定の連続が 人格をつくる

学校教育の目的は人格の完成。そしてそれを可能にする特別活動はすべての教育活動の要となります。教科の専門性だけでなく、教師の原点、役割とは何か。長年にわたり、特別活動のあり方をリードしてきた須藤稔先生に伺いました。

國學院大學栃木短期大学 特任教授
須藤 稔

すどう・みのる●栃木県の公立中学校教諭、管理職を経て宇都宮共和大学、白鷗大学、現任大学で後進の指導にあたってきたほか日本特別活動学会会長、栃木県教育長などを歴任。また、第8期中央教育審議会教育課程部会専門委員 特別活動ワーキンググループ主査代理を務めたほか、学習指導要領の改訂、中・高等学校学習指導要領および解説書、生徒指導要領の作成などに関わる。

日本の学校教育の目的は、人格の完成です。教育基本法の第1章第1条には「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」とあります。そして、人格と自己決定は切り離せないものです。

人格とは何でしょうか。教育基本法成立の1年前に旧文部省から出された「新教育指針」（1946年）には「人間は、人間性として備わっているいろいろな性質・能力・要求を、外からいたわり育てられるだけでなく、内から自らの力、自由な意思と責任とをもって統一し、はたらかせる事ができる、これが人間の人間たる資格で、人格とよばれるものである」と書かれています。人格とは自己決定ができるということ。人間はいろいろな経験をし、大

脳皮質の中にインプットしていきます。何か行動を起こさなければいけないというときに、それまでの経験から得たことを食い違いないように統合し、自分でどう行動すべきなのかを判断するしくみが人格なのです。

生きることは選択の連続 自己決定が幸福度を高める

判断した結果、行動として見える

もので人格が判断されます。人格は脳細胞の働きですから、そのものは見えない。これが教育的な人格の捉え方です。幼稚園生よりも小学生、高校生よりも大学生はたくさん経験をしています。方法の幅は広くなり、質の高い選択ができるようになっていく。それが人格の完成を目指すということなのです。

つまり、人格というのは自己決定で、自己決定ができるようにしていくのが人格の完成を目指すということ。自分を、よりよく生かす自己決定を積み上げていくことが、幸せな人生を生きていくことにつながります。生きること、人生を歩むということは選択の連続です。西村和雄氏（神戸大学）と八木 匡氏（同志社大学）の調査によれば、幸福感には学歴よりも自己決定が強い影響を与えているそうです。（16ページ）

先に紹介した「新教育指針」には「自ら考え自ら判断して行動し（略）他の人々と協同してやってみよう（略）一歩々々人格を完成するように育ててゆくのが教育の仕事である」とも書かれています。教科指導で育成する資質・能力も、生徒指導で育成する自己指導能力も、本来すべて人格の完成という目標を前提としたものなのです。



図1 学習指導要領前文

一人一人の生徒(幼児・児童)が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。

日本の子どもはなぜ自己決定が苦手なのか

日本の子どもたちが自己決定できない背景を考えてみましょう。長い封建制度の下、お上の言うことを聞いていれば良く、自己決定をする必要性がなかったという文化があります。また、日本人は相手の属性によって行動が変化しますね。目の前にどういふ人がいるかで、言い方が変わる、判断が変わる、判断を放棄することもあります。日々接する学生たちにも、すぐに「どうしよう?」「どうしたらいいですか?」と判断を他者に委ねる傾向が見られます。「ああ言ったらどう思う

れるかな?」ということに気にして情緒的な判断をする。意思決定における、論理性がない。価値の優先順位を決められないのです。

残念ながら学校もそういう教育をしてしまっていますよね。「静かにしなさい」「言うことを聞きなさい」「周りを見なさい」：学校でよく聞く言葉ですが、これからの社会を生きていく子どもたちが、このまま言われたことには従順だけれど「決められない」「自己主張できない」で良いのでしょうか。

自己決定は自己主張と自己抑制の調和

このたびの学習指導要領改訂でも、予測困難なこれからの時代に目指す子ども像として「前文」が設けられました(図1)。幼児か児童か生徒か以外の表現は幼小中高すべてに共通しています。「自分のよさや可能性を認識する」というのは自己認識をもつこと

であり、ある意味では自己主張です。「あらゆる他者を：尊重し」というところは自己抑制と言えるでしょう。

新しい学習指導要領では、特別活動についても集団や社会の形成者としての見方・考え方として「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」が示されました。自己実現とは、自分の欲求や要求を実現することと、社会の一員としての認知の両方がある成り立ちです。これを両立できるのが特別活動であり、学校における集団活動は、この両面を人間関係の中で育成するものです。

自己決定とは、単に自分がこれを決めたいと決めるのではなく、自己主張と自己抑制の調和のとれた状態をさすことも、指摘しておきたいと思えます。

自己主張ができる共感的な土壌を特別活動でつくる

では、生徒が自己決定できるようにするために、教師は何ができるのでしょうか。私は、自己主張ができ、共感的な土壌づくりが必須と考えて

自己決定ができる環境をいかにつくるか

います。そのためには自己決定のステップを身につける機会を、計画的に用意することが必要です。特別活動に含まれるホームルーム活動、生徒会活動、学校行事を意識的に活用するのです。

日本人の対人関係において、自己主張する人は自己本位であると考えられてきました。佐藤淑子氏の著書『イギリスのいい子、日本のいい子』によれば、イギリスでは幼児の喧嘩に親が介入するそうです。「なんで喧嘩をしたの?」「何を言いたかったの?」「相手と何が違ったの?」と確認をするので、自己主張の訓練をします。

この本にはもう一つ印象的な言葉がありました。「自己の意思や気持ちを表現すればかなりの確率で他者に受け入れられることが明らかになった時は初めておすおすと自己表現をはじめ」。まさにこれが学校において目指す集団の姿であり、特別活動で

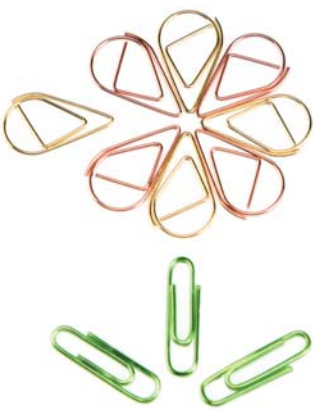
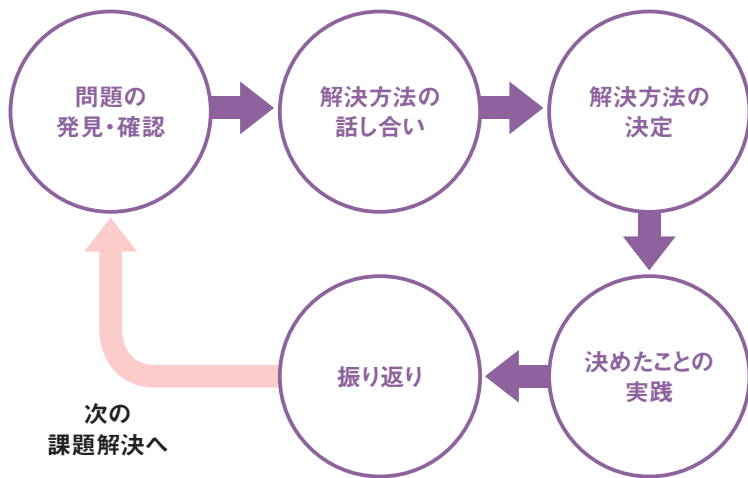


図2 特別活動における学習過程の例示



つくることのできる状態です。
**生徒たちが自分で決める
 何でも生徒に任せてみる**

そのような集団の育成方法ですが、生徒たちに任せてみる腹づもりを持つこともこの方法です。例えば校則でも生徒たちに決めさせる、「自分たちで決められる」という経験をさせることです。何年も前のことになりましたが、私が中学校の校長を務めたときには、生徒の話し合いによって校則を2つに

絞りました。生徒心得には100も200も細かいことが書いてあります。結果「いじめや暴力のない楽しい学校生活にしよう」「時間を守り節度ある生活をしよう」という2つだけになりました。そして、週に1度はチャイムを鳴らさない日にしました。自分たちで時計を見て時間を守るのです。学校というのは自主的な子どもを育てるといながら、自主的に動けるための方法を示してきませんでした。「早くしろ」「チャイムがなったら席に着け」と言つて動かす。逆ですよ。

修学旅行に行くのも制服で行くのが良いのか、私服で行くのが良いか、生徒会で話し合いました。私服で行くならどういふ私服で行けば良いのか、それがするために修学旅行に行く前にはどういふ生活が要求されるのか。帰ってきた君たちの、その後の学校生活はどう変化するのか。話し合つてプランを立てました。

**決める手順を学ぶために
 鍵となるプランと振り返り**

特別活動における学習過程(図2)では、PDCAのプランの部分に注目しましょう。ただ何をする、と決めることではなく、課題の要因は何かを分析し、解決手段を策定し、さらに

は何をもつて成功と言えるのかまで決めるのがプランです。このプロセスを他の場面にも転移できるようにすれば、自己決定の質が変わります。

特別活動は「なすことによつて学ぶ」といわれますが、プランを実行した後振り返りも重要です。自分たちが決めたことは良かったのか、良くなかつたのであれば何が原因なのか、もっと良くするにはどうすれば良いのか。学校行事が終わつたら振り返りの時間をきちんととる。夏休みの計画を立てるのなら、夏休み後に振り返る時間もつくる。生徒が書くことも有効ですし、担任が所見を伝えることも、振り返り

**学校は社会の縮図。
 社会的資質・能力を伸ばす場所**

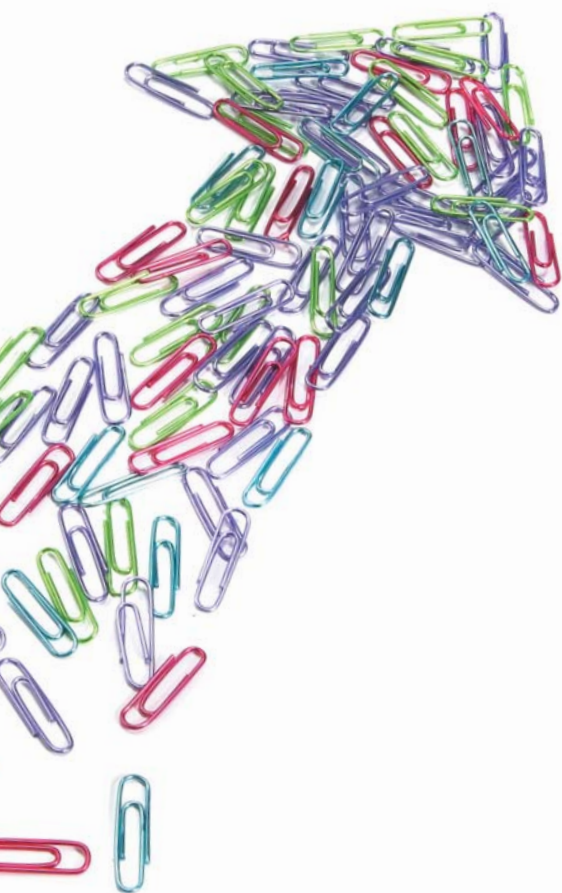




図3 学級・学校文化を創る特別活動の特徴

学校教育の
基盤的な役割を果たす

- 人格的、社会的な自立を培う
- 自主的、実践的な態度を育む
- 魅力ある学級・学校づくりを実現する
- 学級経営や学業指導、進路指導

- 集団活動を通して個を鍛える
- 高校期の教育課題に向き合う
- 人間関係や豊かな人間性を育てる
- 問題解決に関わる実践的な指導力を高める

教師に求められる
教育観を磨く

特別活動は生涯にわたる
人格形成の要となる

紛争以降、生徒会活動が抑制されてきた歴史があります。目の前の進路

を図ろうとする態度を養う。とあります。高校においては学

(1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。

(2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。

(3) 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、主体的に集団や社会に参画し、生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己実現を

何のための活動か、教師が意識するかどうかで生徒への伝わり方は変わ

「あの学校に通えてよかった」と
思える学校生活に

実現のために時間を使わなければいけないという現実もあるでしょう。話し合い活動も小中学校と比べて盛んではありません。しかし、ただ単に勉強しろ、では集団はもちません。学びに向かう集団をどう作っていくのか、カリキュラムマネジメント全体の中で、今一度、特別活動の位置付けを考え直してはいかがでしょうか。

生徒たちは今この瞬間も、生涯にわたる人格の完成に向けた歩みの最中にいるのです。

生徒は担任とホームルームを選べません。それでも「このクラスで良かった」と思って卒業してもらいたいですよね。主体的な活動を通じたさまざまな経験、自己決定の成功体験にあふれる学校文化は、将来「ここに通うことができて良かった」と思える学校生活の揺籠となるでしょう。

ります。図3は、2014年に国立教育政策研究所が示した特別活動の特徴です。特別活動は生徒たちに社会的な自立に向けた力をつけると同時に、教師にとっても問題解決型の授業実践につながる力を鍛え、思春期特有の人間関係など教育上の諸課題を解決する場にもなります。

学校は社会の縮図です。いろいろな背景をもった生徒集団の中で、どう折り合いをつけて生きていくか。失敗

社会に羽ばたくときの
足元を固める特別活動の役割

りの質を高めることになるでしょう。学習に興味をもてない生徒であればなおさら、多様な経験のなかで自分が成長したという実感をもたせたいもの。学校生活への意欲は学業への意欲につながります。特別活動は、授業を支える環境づくりでもあるのです。

や成功を繰り返しながら力をつけ、社会に羽ばたけるアイデンティティをつくる場です。ジャンプするとき足元が軟弱だと高くは飛べません。学習指導要領における特別活動の目標を再確認しましょう。つきたい資質・能力は

